『和漢朗詠集』「扇」部の背景

――公任の四季の構成意図――

田中幹子

はじめに

『和漢朗詠集』は、十一世紀初頭、王朝文化最盛期、関白太政大臣頼忠の長子で、当時の文化的指導者藤原公任が朗詠にふさわしいと判断した珠玉の詩歌を集めた私撰集である。上下巻に百二十五項目を立て、中国漢詩句、日本漢詩句、和歌によって構成している。上巻は、四季を柱に、季の推移と歌材によって項目を立てている。そのうち夏部は、以下のとおり項目が設けられ、その巻末に「扇」が立てられている。

更衣　首夏　夏夜　端午　納涼　晩夏　花橘　蓮　郭公　蛍　蟬　扇　（和漢朗詠集・夏部）

『和漢朗詠集』の項目は、十世紀前半の大江維時が撰した、中国佳句の私撰集『千載佳句』の項目の立て方(註1)、及び、十世紀後半に編纂され、王朝歌人が典拠として頻繁に用いた私撰集『古今和歌六帖』の項目の立て方に強く影響を受けたことはよく知られている(註2)。しかし「扇」部に関しては、『千載佳句』にも項目がなく、『古今和歌六帖』では「服飾」部に所属しており、季節の素材として扱われていない。「扇」は、三代集を含め、先行歌集において夏の季の素材として扱われることがなかった。

『和漢朗詠集』から一世紀後、第二の『和漢朗詠集』として

編まれ、項目の立て方もすべて『和漢朗詠集』に准じている『新撰朗詠集』が、「扇」部だけは設けていない。『新撰朗詠集』の編集者、藤原基俊も季語として評価されていない「扇」を設ける事に抵抗を感じたのであろう。『和漢朗詠集』は三代集の美意識を一歩越えた歌材を提示し、『後拾遺集』初め院政期歌壇に大きな影響を与えたが（註3）、「扇」は夏の歌材としては後世、定着しなかった。

なぜ公任は、『和漢朗詠集』の夏部の、しかも最後という重要な位置に「扇」部を設けたのであろうか。

一

「扇」は、日本と中国では別々の形を指す。日本では「あふぎ」と訓み、開閉自在の扇子形のものに対し、中国では団扇（うちは）をさしている。「あふぎ」は、九世紀頃、日本で発明されたものである。檜の板を綴じて作る檜扇と、竹や木の骨に地紙を貼って作る蝙蝠（かはほり）扇があった。檜扇は、男性用は素地、女性用は大和絵や唐絵の彩画がされていた。蝙蝠扇は、五骨で片貼りである。貴族は、扇を常に手にするようになり、扇合せも催されるようになる（註4）。

扇は、北宋の頃、日本から輸出された。よって唐詩までの「扇」は、すべて団扇（うちは）を指す（註5）。邦人詩の「扇」も、これに倣い専ら団扇（うちは）を指す。

日本で九世紀に檜扇が発明されて以来、『和名類聚抄』が「あふぎ」と「うちは」とを区別しているように（註6）、明らかに団扇（うちは）を詠んだと思われる和歌は見られなくなる。

『和漢朗詠集』の特徴を見るために、『和漢朗詠集』以前、「扇」がどのように詠まれたかを見ていきたい。その最適な資料は『古今和歌六帖』の「扇」項目所収の和歌であろう。

3445 名にし負はば頼みぬべきをなぞもかく扇ゆゆしと名付けそめけん

3446 世の人の忌みけるものを我がために無しと言はぬは誰か変きなり

3447 船出する君に手向と吹く風は慣れて年経し扇なりけり

3448 添へてやる扇の風し心あらば思はん人の手をな離れそ

3449 ゆゆしとて忌むとも今は甲斐あらじよのつきことはこれにつけても

3450 今はとて漕ぎつる船の障りなみ扇の風はへにもかけなん

3451 あふげども尽きせぬ風は君がため我が心ざす扇なりけり

3453 3452 天の河扇の風に霧はれて空澄み渡る鵲の橋
蝙蝠（かはほり）にわがはりこむる涼しさを思ふが方の風ぞいとふな（注7）

（古今和歌六帖・第五服飾・扇）

『古今和歌六帖』では「扇」が季の項目ではなく「服飾」部の下位項目に設けられている点に注目したい。『古今和歌六帖』の用例を軸に、まず和歌で扇がどう詠まれてきたかを整理したい。

第一は、納涼、避暑を象徴する道具として詠まれる場合である。「蝙蝠にわがはりこむる涼しさを」（3453）歌は、夏用の蝙蝠扇を詠んでいる。次に紹介する『万葉集』歌の時代は、檜扇がまだ作られていないので、漢詩と同じく団扇（うちは）を詠んでいる。しかし、内容的には納涼、避暑の具として詠んでいる。

とこしへに夏冬行けや裘（かはごろも）扇放たぬ山に住む人

（万葉集・九・1686・献忍壁皇子歌一首、詠仙人形）

仙人の像が毛皮を着ているのに、手に扇をもっているのを見て、夏と冬が一緒に行くのだろうか、と揶揄した歌である。ここでの扇は、仙人が持つという詞書のとおり、異国人の持ち物として、おそらく舶来品を詠み込むような意識で作られた歌であろう。

『拾遺集』の次の歌も『万葉集』の用例と同じく、夏の暑さ冬の寒さを象徴する道具として扇が詠まれている（注8）。

夏は扇冬は火桶に身をなしてつれなき人に寄りも付かばや

（拾遺集・雑賀・1187）

第二は、餞別の場面で用いられた扇の歌である。「添へてやる扇の風し心あらば」（3448）は、『後撰集』を典拠とする。この歌は『後撰集』の「離別」部に収められ、「旅にまかりける人に扇つかはすとて」という詞書を持つ（注9）。歌の内容も「私の心を添えて贈る扇の風が心があるのならば、私が思うあなたの手を離れないでおくれ」というものであり、扇が餞別の際に用いられていたことがわかる。「船出する君に手向と吹く風は」（3447）や「今はとて漕ぎつる船の障りなみ」（3450）や「あふげども尽きせぬ風は」（3451）（注10）も同じく餞別の際の歌である。次の大中臣能宣の歌も餞別の例である。

別れ地を隔つる雲のためにこそ扇の風をやらまほしけれ　　大中臣能宣

（拾遺集・別・311・物へまかりける人に、馬の餞し侍りて扇遣はしける）

二人を隔てる雲を餞別の品である扇によって払うという趣向の歌である（註11）。餞別の際に扇が贈られることについては、大谷雅夫氏が詳細な用例をあげて考察されている。大谷氏は、餞別の扇は中国の風習に基づいたものであり、『芸文類聚』巻六十九「扇」部等の記事によって都良香等の学者に受容され、それが和歌に影響したと指摘されている（註12）。

第三は、帝の徳政を扇の風と表現した例である。大谷氏の御指摘の中に「仁風」の用例がある。『古今和歌六帖』には用例は見られないが、他書から扇の風を「仁風」ととらえ、帝の徳政を讃える和歌を紹介したい。

草も木も思ふことあらじ万代は君が扇の風になれきて　能宣

（能宣集・332・斎宮より内に御扇奉り給ふに、書くべき歌と召せば）（註13）

君が手にまかする秋の風なればなびかぬ草もあらじとぞ思ふ　　中務

（中務集・123・北の宮の内に奉り給ふ扇に）（註14）

この帝徳賛頌の典拠となったのが、『論語』「顔淵篇」「君子の徳は風、小人の徳は草。草之（これ）に風を上（くは）ふれば必ず偃（ふ）す」である（註15）。

第四は、忌むべきものとして詠まれた扇歌である。「名にし負はば」歌の「扇ゆゆしと名付けそめけん」（3445）や「世の人の忌みけるものを」（3446）や、「ゆゆしとて忌むとも」（3449）等は扇を「ゆゆし」「忌む」ものと詠んでいる（註16）。

第五は、秋風として扇歌である。「天の河扇の風に霧晴れて」（3452）歌は『白孔六帖』「七夕」項目の「七月七日、烏鵲塡河、成橋而度織姫」の七夕の夜、織姫を渡すために天の川に架かる鵲の橋の歌である。この歌の典拠は、天禄四（九七三）年に円融院と同母姉資子内親王が乱碁をし、内親王が七月七日に負態がなされ、その際、和歌が詠まれた、いわゆる円融院扇合である（註17）。この歌は『拾遺集』「雑秋」に採られている。その直前に、同じく円融院扇合から取られた次の和歌が選ばれている。

天の河河辺涼しき七夕に扇の風をなほや貸さまし　中務
（拾遺集・雑秋・1088）（註18）

秋の到来の象徴である秋風を扇の風に見立てている。この場合は特に扇合せが行なわれたのが、七月七日であるため、七夕説話に因んだ和歌となったのであろう。扇（あふぎ）を一年に一度の牽牛、織女の逢瀬（あふせ）の逢（あ）ふを掛けているようにも思われる。しかしこのような「逢（あ）ふ」を想像させる「扇（あふぎ）」の設定はむしろ特殊である。

二

「扇」が「秋風」と組み合せられる場合は、次に紹介する相模歌の場合のように、初秋になると忘れ去られる物と詠まれる方が一般的であった。

手もたゆくならす扇の置き所忘るばかりに秋風ぞ吹く
今はとて扇の風を忘るなよ又来む年の夏もこそあれ
秋来ぬと古き扇を忘れなば又張り替へよよこめならぬに
ぬるかりし扇の風も秋来れば思ひなしにぞ涼しかりける
（相模集・256・354・458・545）（註19）

前章で分類した扇詠のうち、特に注目したいのは、第四の「ゆゆし」「忌む」とされた扇と第五の「秋風」と共に忘れられる扇である。扇が、ゆゆしき忌む物であり、秋になると捨てられる物と詠まれた背景には、白き扇で有名な中国伝説の悲劇の美女の物語があった。

前漢の成帝の寵愛を得ていた班婕妤が、趙飛燕の姉妹が帝の寵愛を得て後、後宮から退けられ、皇太后の御所長信宮付きの侍女となったという『漢書』巻九十七下外戚伝「班婕妤伝」で知られる悲劇の女性、班婕妤の物語である。

班婕妤の悲劇が漢詩の主題となった出発点は、班婕妤自身の作と伝えられた『玉台新詠』では「怨詩」（註20）、『文選』では「怨歌行」と題された次の詩である。

「怨歌行」　班婕妤（註21）

新裂齊紈素　新たに齊（せい）の紈（ぐわん）素を裂けば
皎潔如霜雪　皎潔（けうけつ）にして霜雪の如し

裁為合歓扇　裁ちて合歓（がふくわん）の扇と為せば
団団似明月　団団として明月に似たり
出入君懐袖　君が懐袖（かいしう）に出入し
動揺微風発　動揺して微風発す
常恐秋節至　常に恐る　秋節の至りて
涼風奪炎熱　涼風　炎熱を奪ひ
棄捐篋笥中　篋笥（きやうし）の中に棄捐（きえん）せられ
思情中道絶　思情　中道に絶えんことを

斉国産の白絹を裂くと、それは潔白でさながら雪や霜のようだ。それを裁ち切って円扇を作ったら満月のようである。この扇は君の袖や懐に出入りして、動かすたびにそよ風が起る。けれど心配なのは、やがて秋の季節が訪れて、涼風が暑さを吹き去ると、同時にわが身も秋の扇として箱の中になげこまれ、君の情も、中途で絶ち切られる。

帝の寵愛を一身に受け、贅沢な素材をふんだんに使って特別に拵えた、夫婦和合の象徴であった白絹の扇が、秋になったら使われなくなってしまうように、美貌で才学優れた班婕妤が、突然、新たに現われた趙飛燕のためにうち捨てられてしまった悲劇は、詩人達の心を捉らえた。深く愛されながら、ある時を境に手のひらを返したように、捨てられる、その劇的に変る彼女の身の上と、夏はどれほど重宝していても秋になったとたん不要になり顧みられなくなる扇を重ね合せる趣向が詩心を煽ったのであろう。

以来、六朝、唐詩から、わが国の勅撰三漢詩集及び、島田忠臣、菅原道真の詩文に班婕妤の悲劇が詠まれて行く。これらの作品の源には、常に伝班婕妤作の「怨歌行」の表現があった。

「怨歌行」を受容する際、重要な要素となったのは第一に、「新裂齊紈素、皎潔如霜雪」の「霜雪」の白さ、第二に、「裁為合歓扇、団団似明月」の「明月」の円さ、第三に、「常恐秋節至、涼風奪炎熱」の秋の到来の恐れである。逆に言えば、「白さ」と「秋に捨てられる」要素が表現されていれば、その背景に班婕妤の悲劇が込められていると考えてよい。特に『芸文類聚』「天部」「雪」項目に、この詩句が引用されているように、「白さ」は、班婕妤詩のうち最も重要な要素である。これら要素に注目し、中国詩、邦人詩の「怨歌行」詩を受容の様子をいくつかの用例から見て行きたい。

『文選』に収められている王季哲の作に和した南斉の謝玄暉（朓）の詩にも、夫に見放された女の怨みを表現する際、「辞

寵悲班扇（寵を辞して班扇を悲しむ）」（文選・雑詩下・「和王主簿怨情」）と班婕妤の悲劇が用いられる。「班婕妤は帝の寵愛を失い、捨てられた団扇のような運命を悲しんだ」として、扇と班婕妤の身の上を重ね合せている。

又、『文選』「雑擬下」梁の江文通（淹）の「雑体詩三十首」の「班婕妤（詠扇）」も、扇が用いられなくなる如く、夫の愛情がなくなるのを心配することを述べた詩である。「紈扇如円月　出自機中素（紈扇は円月の如く機中の素より出づ）」「白絹で張った扇は、円い月のようであり、そのねり絹は、機の中の白絹から生れたものである」と夫に捨てられる妻を捨てられる扇に重ねるだけでなく、白さを讃えている。又、「紈扇」の「紈」や「円月」の「円」は、「怨歌行」の「新裂齊紈素、皎潔如霜雪、　裁為合歓扇、団団似明月」の「紈素」「霜雪」と「団団」を踏まえた表現である。

初唐にも班婕妤の悲劇が秋の扇とともに詠まれるが、盛唐の王昌齢の詩は班婕妤そのものを主題として、彼女の悲劇を「秋扇」として詠む（註22）。

「西宮秋怨」　　王昌齢

芙蓉不及美人粧　　芙蓉も及ばず美人の粧（よそほひ）

水殿風来珠翠香　　水殿　風来つて珠翠（しゆすい）香（かんば）し

卻恨含情掩秋扇　　卻（かへ）つて恨む情を含んで秋扇を掩（おほ）ひ

空懸明月待君王　　空しく明月を懸けて君王を待つを

邦人詩における班婕妤を見たい。帝という地位のせいか、嵯峨天皇が班婕妤の悲劇に強く興味を持った様子が目に付く。紹介したい。

「婕妤怨」　　嵯峨天皇

昭陽辞恩寵　　昭陽　恩寵を辞し

長信独離居　　長信　独り離居す

団扇含愁詠　　団扇　愁を含みて詠（うた）ひ

秋風怨有餘　　秋風　怨（うらみ）餘（あまり）有り

（文華秀麗集・艶情・58）

「秋風を怨む」理由は扇が不要になるためであり、捨てられた班婕妤の運命を扇になぞらえている。ここには、白さの表現が見られないが、この詩に唱和した巨勢識人の「奉　和婕妤怨

」には「昔時同輦愛、翻怨裂紈情、孤帳秋風冷、空廉暁月明」と「白い練絹を裂いて作った団扇」と「怨歌行」の第一の要素である白さが表現されていた。

嵯峨天皇が班婕妤の扇の白さを強く意識していたことは次の用例からわかる。嵯峨帝は、雪の題で「班姫秋扇已無色（班姫が秋扇已に色無し）」（『菱雲集』「和菅清公賦早雪」）と班婕妤の表現を用いている他、月の題でも班婕妤の扇を詠んでいる。それが「皎潔秋悲班女扇（皎潔なり秋を悲しぶ班女が扇）」（『文華秀麗集』「和内史貞主秋月歌」）である。秋（飽き）の訪れとともに、月光のごとき真っ白な扇が忘れ去られるように班婕妤が捨てられるという表現である。

班婕妤の扇を詠んだのは、嵯峨帝だけではない。滋野貞主の詩には「班姫酷怨因軽扇（班姫が酷怨は軽扇に因る）、菅女微霜自晏天（菅女が微霜は晏天に自りす）」（『経国集』「重陽節神泉苑賦秋可哀、応制」）つまり「班婕妤のひどい怨みは軽やかな夏の団扇が秋になって捨てられたように寵愛を失ったことによる。秋の女神の司る微量の霜は秋の空から降ってくる」という一節がある。「秋風の到来とともに不要になった扇」という一つの主題がこの時代意識されていたことがわかる。

次に、菅原道真の「扇」詩を紹介したい。

「扇」

団団紈素扇　団団たり　紈素の扇
随手幾成功　手の随に　幾たびか功を成せる
一転看孤月　一たび転びて　孤月を看る
頻揺得細風　頻に揺きて　細風を得たり
逆愁秋早至　逆に秋の早に至らむことを愁ふ
偏待熱先隆　偏に熱の先づ隆（さか）りならむことを待つ
取捨知時節　取捨　時節を知る
軽身薬豈空　軽き身なれども　薬は豈に空しからめや

（菅家文草・408）

「団団紈素扇」や「一転看孤月」という円い白い扇とは、「怨歌行」の「新裂齊紈素、皎潔如霜雪、裁為合歓扇、団団似明月」に基づく表現である。「逆愁秋早至」とは、普通、早くやり過ごしたい暑い夏も、秋になったら捨てられる扇の身になれば少しでも長く夏が続くことを願うという発想である。これも明らかに班婕妤「怨歌行」を踏まえた表現である。

白絹の扇は、班婕妤の寵愛の象徴であった。秋（飽き）風の

到来とともに、不要になった扇と同じく、班婕妤は帝の寵愛を失う。これによって、不吉な物、悲しむべき物という意味付けがなされて行く。前章で「秋風」に組み合わされたり、「忌む」べきもの「ゆゆし」と詠まれた扇詠は、班婕妤を背景にした表現なのである。

三

このように見て来ると、日本の「扇」歌の背景には、「餞別」「仁風」等、はっきりと中国の慣習や漢籍を典拠とするものの他、「秋（飽き）風」、「ゆゆし」き物としての歌についても、中国の悲劇の美女班婕妤の影響を受けていたことがわかった。では、『和漢朗詠集』「扇」部は班婕妤とどう関わるのだろうか。

班婕妤との関係を考える前提として「扇」部が『和漢朗詠集』の構成上、どのような位置を占めるかを考えたい。

三木雅博氏は、『和漢朗詠集』の構成は、『古今集』に准じたものであると考察されている（註23）。構成の中心は、春部と秋部、夏部と冬部が対称的になるように、公任が項目を設け、意識的に構成しているというものである。

『和漢朗詠集』の夏部と冬部の項目は次のとおりである。

〈夏〉　更衣・首夏・夏夜・端午・納涼・晩夏・花橘・蓮・郭公・蛍・蟬・扇

〈冬〉　初冬・冬夜・歳暮・炉火・霜・氷（付春氷）・雪・霰・仏名

「扇」項目が夏部の巻末に置かれた意図を三木雅博氏は、次のように考察されている。

夏・冬を対比させれば、首夏ー初冬、夏夜ー冬夜、晩夏ー歳暮、といった部立の対立が成り立つであろう。夏部末の「扇」と冬部末の「仏名」とは、一見対立関係が成立しそうに思えないが、「花橘・蓮・郭公・蛍・蟬」と自然の景物が続いてきたところに、最後にわざわざ「扇」という異質なものが置かれているのは、冬部において「雪・氷・霰」と自然の景物が続いた最後に「仏名」が置かれているのと軌を一にし、ここも両者は対応しているものとみたい。扇は－略－仏事部の『魔可止観』第一句においては、衆生を済度する真理の教えの喩えに用いられており、－略－こうした仏教的な要素により、両者を対立関係に置くことがで

きるのであるまいか。

三木氏のいわれる『和漢朗詠集』「仏事」に収められている『魔可止観』は次の句である（註21）。

月隠重山兮　拏扇喩之
風息大虚兮　動樹教之　止観

月重山（ちようざん）に隠れぬれば　扇を拏（ささ）げてこれに喩ふ
風大虚（たいきよ）に息（や）んぬれば　樹を動かしてこれを教ふ
（和漢朗詠集・仏事・587）

確かにここでは、扇と仏教が結び付く。実際、払子（ほっす）等、もともとはインドで僧が蚊や蠅を払うために扇状のものを用い、扇は、平安貴族の日常品になる以前に仏教で馴染みの具の一つであったと思われる。

しかし扇詩として考える場合、この詩句は、『和漢朗詠集』下巻「仏事」部にあるもので、四季の冬部の最後である「仏名」部にはない。また管見の限り扇を詠む詩歌において、仏教的色彩は主流とは思えない。

「扇」部が『和漢朗詠集』の「夏」部の最後に設けられたのは、「冬」部との対称のためではなく、「秋」部への移行のためであると考える。

『和漢朗詠集』「扇」は、以下のとおりである。

199　盛夏不銷雪　終年無尽風
引秋生手裏　歳月入懐中　白楽天
盛夏に銷（き）えざる雪　年を終ふるまで尽くること無き風
秋を引いて手の裏（うち）に生（な）る　月を歳（かく）して懐の中に入る

200　不期夜漏初分後　唯覚秋風未至前　菅三品
期せず夜漏の初めて分れて後　唯だ覚ぶ秋の風の未だ至らざる前

201　天の河河辺涼しき七夕に扇の風をなほや貸さまし　中務

202　天の河扇の風に霧はれて空澄み渡る鵲の橋　清原元輔

203　君が手にまかする秋の風なればなびかぬ草もあらじとぞ思ふ　中務

「扇」部が秋への移行を意図して設けられたことは、「天の

河河辺涼しき七夕に扇の風をなほや貸さまし」（201・中務）「天の河扇の風に霧はれて空澄み渡る鵲の橋」（202・清原元輔）という『拾遺集』の秋歌を連続して入集させたことから明らかである（註25）。

秋への移行という『和漢朗詠集』「扇」部の編集意図を考察する場合、班婕妤の扇を、公任がどう扱おうとしたかが最大の問題となる。

公任は、勿論、班婕妤の扇は熟知していた。なぜなら、「扇」部以外に『和漢朗詠集』に取られている那人の扇を詠んだ詩句が、すべて班婕妤の扇を詠んだものだからである（註26）。

班婕妤団雪之扇　代岸風兮長忘
燕昭王招涼之珠　当沙月兮自得　匡衡（註27）

班婕妤が団雪の扇　岸風に代へて長く忘れたり
燕の昭王の招涼の珠　沙月に当て自ら得たり
（和漢朗詠集・納涼・162）

班女閨中秋扇色　楚王台上夜琴声　尊敬（註28）

班女が閨の中の秋の扇の色　楚王の台の上の夜の琴の声
（和漢朗詠集・雪・380）

班姫裁扇応誇尚　列子懸車不往還　保胤（註29）

班姫扇を裁して誇尚すべし　列子車を懸けて往還せず
（和漢朗詠集・風・400）

これらは「班婕妤」（納涼・162）「班女」（雪・380）「班姫」（風・400）のように、班婕妤の名が詩句にそのまま現われており、明らかに班婕妤の物語を本説にして詠まれたことがわかる。また公任自ら扇を「ゆゆし」と詠んでいる。

扇をばなほゆゆしとぞ思ひこし今日は甲斐あるしるしなりけり
（公任集・370・実方の少将、祭の使ひせしに、貝を花に入れたりし扇を遣り給ふとて）（註30）

『古今和歌六帖』の「扇」部所収歌の「ゆゆし」「忌む」の表現には、班婕妤の扇が影響している（註31）。平安人にとって、班婕妤の扇が「ゆゆし」き物ととらえることが常識であったことが、同時期に執筆された作品である『源氏物語』からもわかる。

（浮舟）いと恥づかしくて、白き扇をまさぐりつつ添ひ臥したるたかはらめ、いと限なう白うて、なまめいたる額髪

の際など、いとよく思ひ出でられてあはれなり。－略－琴は押しやりて「楚王の台の上の夜の琴の声」と誦じ給へるも、かの弓をのみ引くあたりにならひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍従も聞きゐたりけり。さるは、扇の色も心おきつべき闇のいにしへをば知らねば、ひとへにめできこゆるぞ、後れたるなめるかし。

（源氏物語・東屋）

大君の形代として浮き舟を手に入れたものの、白き扇が班婕妤の扇を連想させて不吉であるということに気がつかない浮舟に薫が失望する場面である。班婕妤の扇がゆゆしきものであるという認識は、男君のみならず、女君にとっても基本的な教養だったのである。

このように「扇」といえば、班婕妤の扇がまず浮かぶ平安時代に、公任はどのような意図で『和漢朗詠集』「扇」部の詩歌を選んだのだろうか。

まず「扇」部199の詩句の典拠を示したい。白楽天の詩句の原典は、白い羽で作った団扇を詠んだ次の詩である。傍線部が『和漢朗詠集』に採句された部分である。

「白羽扇」　白楽天

素是自然色　素は是れ自然の色
円因裁製功　円は裁製の功に因る
颯如松起籟　颯として松の籟（らい）を起すが如く
飄似鶴翻空　飄として鶴の空に翻るに似たり
盛夏不銷雪　盛夏に銷（き）えざる雪
終年無尽風　年を終ふるまで尽くること無き風
引秋生手裏　秋を引いて手の裏（うち）に生（な）る
歳月入懐中　月を歳（かく）して懐の中に入る
摩尾斑非匹　摩尾は斑にして匹に非ず
蒲葵陋不同　蒲葵は陋（ろう）にして同じからず
何人称相対　何人か相対するに称（かな）ふ
清瘦白蠅翁　清瘦白蠅の翁　（白氏文集・3211）

この団扇の白さは、自然の色であり、円さは、製法の巧みさによる。松風のような涼しい風を起こし、鶴が翻るようにひらひらする。夏にも消えない雪かと怪しみ、年中尽きる所ない風を含んでいる。手に握ったままで、秋風を引き入れ、懐に収むれば満月を抱いたようである。払子は斑があって到底比較にならず、蒲葵扇（註32）はいやしくて見劣りがする。この高潔円満

な団扇を持つのに、ふさわしい人物は、この痩せた白髪の老人ぐらいのものであろう。

班婕妤の扇を詠んだ漢詩句は、数多くあるのに、公任は悲劇の美女班婕妤の面影とまったく感じられない白髪の老人の詩句を「扇」部の巻頭に選んだ。

しかし一見、何も関係が感じられない、班婕妤の扇とこの「白羽扇」の詩句は、「白さ」という共通項を持っている。「白羽扇」の「素是自然色、円因裁製功」や「盛夏不銷雪」の表現は、「怨歌行」の「新裂齊紈素、皎潔如霜雪、裁為合歓扇、団団似明月」を連想させる。

「扇」部200の菅原文時の「不期夜漏初分後、唯翫秋風未至前」の原典は残っていない。『私注』によって「軽扇明月を動かす」という詩題が知られるのみである。扇を月に喩えたものであり、この扇が団扇形をしていることがわかる。

詩句の意は、本物の月を待たなくとも、満月と同じ円い扇をもっているから充分だというものである。班婕妤の扇との関係は格別感じられないが、扇子形の檜扇を専ら使用する中で、円い団扇形の詩を詠むということ自体、かなり意識的な表現行為だったと思う。班婕妤の扇と結び付けるならば、「怨歌行」の「裁為合歓扇、団団似明月」の満月に似ているという表現であろう。扇こそが明月であり、だから扇さえあれば、真の明月はいらないという趣向である。

「扇」部所収の和歌201の中務の「天の河河辺涼しき七夕に」と202の元輔の「天の河扇の風に霧はれて」については、先に考察したとおり、七月七日に行なわれた扇合せの際の歌であったため、牽牛・織女の逢瀬（あふせ）に因んだ「扇（逢ふき）」という意識で詠まれたものと思われる。

しかしこれらの和歌の背景には、「扇」を「秋風」と結び付けることを不自然とは感じない歌人の感覚があった。その感覚とは、秋になったとたん今まで重宝していた扇が不要になるという感覚であり、その源には班婕妤が帝に飽きられて不要にされたという悲劇の物語があった。

そして「扇」部最後の歌が、203の中務の「君が手にまかする秋の風なればなびかぬ草もあらじとぞ思ふ」である。この歌も第一章で紹介したように、『論語』を典拠とした徳政を讃える歌、漢籍でいうところの「仁風」を和歌にしたものであった。しかしこの歌は徳政に重点を置いて「扇」部に採られたのではない。君の手によって秋の風を呼び起こし、季を夏から秋に変換させるという点が重要なのである。

この歌は、単に「扇」項目の最後の歌というのではなく、「夏」

部の最後の歌でもある。「夏」部の最後において時間が切断されるのではなく、「君の手」によって風を起こし、夏から秋に変えられるものだという公任の意図が込められているのである。

また「扇」部最後の203の「君の手にまかする秋の風」という表現は、「扇」部の最初の199の「引秋生手裏（秋を引いて手の裏に生る）」という表現と一致する。

公任が「扇」部に選んだ詩歌は、班婕妤の「扇」の従情、怨情の明らさまに表に出すものではなかった。しかし捨てられる秋の扇に飽きられた女の悲しさを重ね合せる趣向を読みとったからこそ、「扇」部を秋部に繋げる夏部の最後に設けたのである。

しかし、この公任の巧みな編纂意図は、あまりの巧みさゆえ後世に理解されなかった。『和漢朗詠集』の項目選択、編纂方法に強く影響を受けたことを指摘されている『後拾遺集』にも『堀河院百首』にも、『和漢朗詠集』を忠実に学習したはずの『新撰朗詠集』にさえ受け継がれることはなかったのである。

註1　『和漢朗詠集』が『千載佳句』の影響をいかに強く受けたかについては、三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』（勉誠社、平成七年九月）に詳しい。

註2　紫藤誠也氏「「古今和歌六帖」と「和漢朗詠集」」（『和歌文学研究』26号、昭和四十五年七月）。

註3　川村晃生氏「新風への道」（『摂関期和歌史の研究』三弥井書店、平成三年四月）。同氏「廃園の風景」（和漢比較文学叢書13『新古今集と漢文学』汲古書院、平成四年十一月）。拙稿「『和漢朗詠集』「蹴鞠」部成立の背景ー王朝の色彩美ー」（鈴木淳氏・柏木由夫氏『和歌　解釈のパラダイム』笠間書院、平成十年十一月）。拙稿「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露ー和漢朗詠集の秋の夕（秋興・秋晩）についてー」（『京都語文』第三号、平成十年十月）。拙稿『和漢朗詠集』『後拾遺集』における秋の夕暮れーー「夕されば野辺の秋風身にしみて」ー（『就実語文』第二十号、平成十一年十二月）。

註4　『和漢朗詠集』以前に行なわれた扇合せとしては、『貫之集』によって藤原恒佐家で行なわれたものや、本稿の円融院扇合が知られる。久保田淳氏・馬場あき子氏『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、平成十一年五月）。

註5　鈴木敬三編『有識故実大辞典』（吉川弘文館、平成九年）。

註6　『和名類聚抄』巻六「調度部、服玩具」に「扇」と「団扇」が別項目で立てられ、それぞれ「阿布岐」、「宇知波」が訓みとして付されている。

註7　本稿の和歌は『新編国歌大観』所載本文より、私に適宜漢字に改めた。『白氏文集』は那波本、番号は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（同朋舎、昭和三十五年三月）所載「綜合作品表」、訓みは『続国訳漢文大系』（国民文庫刊行会・昭和五年八月）による。『和漢朗詠集』及び『源氏物語』の本文及び訓みは、新潮日本古典集成による。『菅家文草』『文華秀麗集』本文及び訓みは岩波古典文学大系による。

註8　この他、『道信集』（103・涼みに来たるに、今なんとも言はでいにければ）「水無月の扇の風の手もたゆく契りし河の瀬々は涼しや」等がある。猶、藤原道信は、中古三十六歌仙で公任、実方等と交流したが、正暦五（九九四）年に二十三歳で歿した。

註9　『後撰集』（離別　羈旅・1330・よみ人しらず）では、第四句「わが思ふ人の」となっている。ほぼ同文（第二句「扇の風の」）が『宗于集』（13）に収められている。

註10　原典『貫之集』（754）にあり、詞書に「筑後の守の下るに扇遣るに加へたる」とある。

註11　『中務集』（97・越へ行く人に扇遣るとて）「白山の雪の名残は寒くとも形見の風はあふぎつつゆけ」（98・ものへ行く人に扇遣るとて）「君が行く船路数ふる扇には心に叶ふ風ぞ吹きける」『能宣集』（39・東へまかる人に扇遣はすとて）「別路に隔つる雲のためにこそ扇の風はやらまほしけれ」

註12　餞別の扇及び、仁風の扇の漢詩文的背景については、大谷雅夫氏「餞別の扇―歌語と詩語―」（『国語国文』第六十四巻第三号、平成七年三月）が詳しい。大谷氏は、和歌の扇詠は、大和言葉「あふぎ」ではなく、漢詩文の「扇」詩の方に影響を受けていると考察されている。それ故、「あふぎ」から「逢ふ」の連想を生まず、班婕妤の扇から忌まれたと同時に、仁風の原拠も餞別に扇を贈るのも、『芸文類聚』巻六十九「服飾部」上「扇」部等の記事によって都良香の「君子所重、扇揚仁風」（都氏文集・巻三・贈渤海客扇銘）等のように詠まれ、それが和歌に影響したと指摘されている。猶、この『芸文類聚』の分類方法が、『古今和歌六帖』で「扇」が第五帖「服飾部」に設けられたことに影響していると思われる。

註13　『能宣集注釈』私家集注釈叢刊7（貴重本刊行会、平成七年十月）によると、当歌の詞書の「斎宮」については種々の問題があり、不明である。『円融院歌合』では、第五句が「風になびきて」となっている。

註14　「北宮」とは、康子内親王をさす。

註15　季康子が「国を治めるために、従わない者を殺していいのか」と孔子に尋ねると、孔子が「殺す必要はない。あなたが善を求めるならば、人民は自然を善になる。上に立つ者の力は風のようであり、下にある者の行ないは草のようである。草は風が当たれば、その方向になびくものである。」と答える。

註16　この他に、『道信集』（107）「忌むとかや人の言ふなるものなれどあふぎてふなにまどはるるかな」等がある。

註17　『円融院扇合』「宮の御方に上おはしまして、乱碁とらせ給ひて－略－紫檀のおきぐちしたる螺鈿の御箱に檜扇十枚入れさせ給ひて、唐の薄物の蘇芳の裾濃のさいでに包みて、同じ村濃の組して白金を桔梗女郎花の枝に作りて付けさせ給へり、白金黄金の小物ただのも様々多かり、扇どもの下に、唐の羅を藍色に染めて一重にて張れる、縫へる手にて」の詞書がある。

註18　『拾遺集』「雑秋」の当歌の詞書は次のとおりである。「天禄四年五月二十一日、円融院の帝、一品宮に渡らせ給て、乱碁とらせ給ける負態を、七月七日にかの宮より内の台盤所に奉られける扇に張られて侍ける薄物に、縫りつけて侍ける」

註19　『相模集』（256）は「早秋」、（354）は「初秋」、（458）は「七月」、（545）は「秋」となっている。猶、相模は生没年未詳だが、一条朝の出生と考えられる。

註20　『玉台新詠』巻一の序に「昔漢成帝班婕妤、失寵、供養於長信宮。乃作賦自傷、并為怨詩一首」とある。

註21　古楽府は作者が不明なのが一般なのに対し、班婕妤だけが名が伝わることについて、早くは、梁の劉勰（りゅうきょう）によって疑われ（『文心雕龍』・明詩篇）、自作とは考えられていない。

註22　盛唐の著名詩人李白も「怨歌行」、王維も「班婕妤」と班婕妤の悲劇を詠み、唐代の詩人に班婕妤の物語が大きな影響を与えたことがうかがえる。

註23　三木雅博氏の御著書。註1参照。

註24　『六百番歌合』の「夏の夜の月は入りぬる慰めにならす扇をたとふばかりぞ」（家房）は、この詩句を本説とする

が、これは『和漢朗詠集』の後世への影響の一例と見るべきであろう。

註25　『拾遺集』「雑秋」（1088）・（1089）に入集。なおこれらの典拠については、第一章で引用したので省略する。

註26　『和漢朗詠集』の「扇」詩は、この他「恋」部（778）の「更闌夜静、長門閉而不開。月冷風秋、団扇棄而共絶。」について『和漢朗詠集私注』では典拠『遊仙窟』となっているが、この詩句は現存しない。

註27　典拠は『本朝文粋』（八・223）「夏夜守庚申侍清涼殿同賦避暑対水石応製」である。

註28　『私注』で「雪に題す」とある。

註29　『私注』で「清風何の処にか隠れる」とある。

註30　『新編国歌大観』所載宮内庁書陵部本公任集では「実方」が「つねかた」となっている。本稿では『公任集全釈』私家集全釈叢書7（風間書房、平成元年五月）の底本桂原政春氏蔵本に従った。

註31　『古今和歌六帖』「扇」部の「名にし負はば」（3445）「世の人の忌みけるものを」（3446）「ゆゆしとて忌むとも今は」（3449）等の歌である。

註32　蒲葵扇（ほきせん）とは、葉や鳥の羽で作ったもの。

追記　本稿は、本学片山享先生主催の『和漢朗詠集』研究会で発言した私見をまとめたものである。結果的に、「扇」部担当の本学大学院生田中佐代子氏の報告資料と本稿用例とが一部重なる点があることをおことわり致します。

猶、研究会の席上、田中佐代子氏は中国における扇詩の用例を網羅的に詳細に報告され、教えられる点が多々あったことを記して謝意を表したいと存します。